11月8日　年間第32主日　マタイ25章1～13節　花婿を迎えるために必要なもの

先週は諸聖人の祭日でしたが今週は年間に戻ります。１１月は最終週から待降節が始まりますので、それまでの三回の日曜日には終末に向かう内容の朗読が行われます。今日の福音はその最初です。

今日の福音は１０人のおとめのたとえです。このたとえを理解するにはその当時の結婚式の行事を理解する必要があります。

結婚式は夜に行われ、花嫁は自分の家で花婿を待ちます。花嫁の友人たちはたいまつを用意して一緒に待機します。彼女たちは介添え、つまりブライズメイドですね。そして花婿が花嫁を迎えに来ると、花嫁は花婿と一緒に花婿の家に行き、そこで婚宴が行われます。その道を照らすのが彼女たちの役割というわけです。

花婿はたびたび遅くなったようで、今日のたとえでも待ちくたびれたおとめたちは眠ってしまいます。ようやく到着したときに、５人のおとめたちは油を用意していなかったことに気づき、油を買いに行っている間に婚宴に入れなくなってしまうというわけです。

小学校のときには、先生や親から「あしたの用意は前の晩にしなさい」と言われたことがあるでしょう。ランドセルに明日の教科書、筆箱、絵の具や体操服などを用意します。わたしは今でも次の日に京都に行くときなどはリュックに必要なものを用意しますが、よく大事なものを忘れることがあります。スマホの充電コードとか手帳、当日の資料とか。お風呂セットは忘れないのに。そして５人のおとめのように、当日行く直前に必要なものを思い出して探しているうちに電車の時間に遅れそうになることがよくあります。

自省も含めて考えますと、五人のおとめは何を目的に来ているのか、何のためにたいまつを用意しているのかをよく考える必要があったということです。さらに言うなら、花婿を迎えることを何よりも喜んで待っていたらそういうことにはならなかったでしょう。

このたとえ話で「世の終わり」についてイエスは語られます。婚宴は神の国、花婿は神の国の完成のときに、ふたたび来られるイエスを表しています。初代教会では、最初は世の終わりは近いと考えられていましたが、次第に「いつくるかわからないから用意しておこう」という考え方に変わっていったようです。その考えが今日のたとえにも反映されています。この状況は今も続いているといえるでしょう。

入れなかった５人は自業自得とはいえちょっと気の毒ですね。これは神の国から追い出されるというよりも、心構えの大切さが示されていると考えることができます。せっかくイエスが来られるのに、先々週のおきての福音で示されたように、神を愛し、隣人を愛することを怠っていたらイエスとの出会いの機会を見失ってしまうということを教えているのではないでしょうか。世の終わりに限らず、毎日の生活の中でのイエスとの出会いを見失わないようにしたいものです。　　（柳本神父）